

日本文学会の思い出

大学院博士課程の創設の頃

——先達の三先生を偲んで——

福田 晃

昭和四六年（一九七二）四月、わたくしは縁あって、立命館大学に赴任した。学園紛争の余燼が残る大学で、激しい怒号、足踏みなどのなかでおこなわれる大衆団交に、まず驚かされたが、担当の講座のなかで、学生が次々と立ち上がって、なぜ文学か、なぜ日本文学か、などと詰問をあげせかけてくるのには、いささか閉口させられた。そのような不毛な状況のなかで、文学部の有名教授の多くが、立命館を去り、わたくしの前任者も、学生たちの罵声に耐え切れず、立命館の教壇を去られたと聞く。しかしそのなかで、学園に踏みとどまり、暴力学生たちと厳しく対峙して、その教学・研究を堅持する中心にあられたのが、数少ない立命館出身の教授たちであり、同出身の少壮の研究者であったと、後から知るようになった。ちなみに、その前者の代表が、地理学専攻の谷岡武雄先生、中国文学の白川静先生であり、後者の代表が、今、総長をつとめる西洋史専攻の長田豊臣氏である。

そのような状況下で、日本文学会の活動はどうであったか。大会や国語教育ゼミナールについては、はっきり記憶にないが、月

いっぺんの談話会は、嘗々と続けられていた。はじめてわたくしが先達の国崎望久太郎先生に勧められて、広小路学舎・清心館二階の書物に囲まれた薄暗い共同研究室の一角に参じると、三〇代前後の方々が、およそ二〇名近く、顔を寄せている。多くが高校の専任教員であり、一部は大学の研究職に属しておられるという。しかも、その中心には、国崎先生をはじめ、和田繁二郎先生・鷹津義彦先生も座しておられる。ご存知かと思うが、国崎先生は正岡子規・石川啄木の研究などで世に知られるのみならず、『日本文学の古典的構造』など、古典文学にも精通する碩学であられた。また和田先生は、近代文学、特に未開拓の明治初期の文人研究に名を馳せておられたが、かつては中世の説話文学研究にも携って、古典にも通じておられた。そして鷹津先生は、朔太郎・中也などの詩のすべてをそらんじられるほど、その研究の中心は近代文学であられたが、岩波の日本古典文学大系（正）（続）百巻に精通されて、独特の日本文学史を構築されていた。わたくしは、随次、談話会に出席するなかで、古代から現代に及ぶ参加者の発表に、

三先生がそれぞれに助言を与えておられることに、深い感銘を受けたことであつた。

わたくしが赴任した当初、日本文学専攻の当面の課題としては、大きく二つあつたように思う。その一つは、学生の変化に応じたカルキュラムの改訂であつた。それは鷹津先生が学部長をつとめる文学部全体の課題でもあつたが、専攻としては古い国文学の体系を近代・現代にも応じ得るものとする、また文学研究を開かれたものとして学際的研究を重視することであつた。思えば、古典と近代を互角とする今日の教学・教員体制はこの折に築かれたものであり、また人文科学総合講座、たとえば日本文学専攻担当の神話学・民俗学・日本文化論などの開講も、このカルキュラム改訂のなかで進められたものである。そしてもう一つの専攻の課題は、大学院の修士課程に、博士課程を加えることであつた。その当時文学部でこれを有したのは、地理学と中国文学（東洋思想）の二専攻のみであつた。国崎先生の口ぐせは、「目前で学位を出したい」ということであつた。読者の皆さんはご存知であろうか。立命館出身の学究者が、自らの学問を大成されても、文学博士の学位を取得するには、他大学の門を叩かねばならぬ。しかしそれぞれの大学には、学風・学統があり、学閥はやはり厳然と存在しているので、それは容易ではなかつたのである。しかも申請に当つては、教学の中心となられる三先生は、その資格を改めて文部省の審査を受けられることになる。阪大の名誉教授で、長年にわたり専攻教学を支えておられた小島義男先生をはじめ、中

古文学の重鎮・田中重太郎先生、中世文学の碩学・岡見正雄先生、国語学の泰斗・阪倉篤義先生を客員教員に迎え、助教授の森本修さん（近代文学）とわたくし（古典文学）とが加つて、申請書は提出された。しかして審査の結果、三先生は揃つて教授と判定され、昭和四十八年の春、大学院日本文学専攻に博士課程が開講された。「目前で学位が出せる」という三先生のお喜びは格別であつたように思う。こうして花園大学の土岐武治さん、奈良大学の鈴木弘道さん、あるいは香川大学の森本茂さんなど、古い卒業生の方々が、次々と論文博士の学位を取得されたのであるが、専攻主任としてお世話申しあげたわたくしは、三先生と古い卒業生の皆さんの晴れ晴れとした授与式の日々を忘れ得ぬのである。

わたくしは、国崎・和田・鷹津の三先生の依託を受け、専攻教学の一端をリリーフとして担わせていただき、三〇余年に及ぶ。その縁の不思議を思い、感謝の念が禁じ得ない。そして日本文学会五〇周年にあたり、学生・院生のみならず、卒業生たちにまで教学の責任を果された三先生の大きさを改めて偲ぶ次第である。

（ふくだ・あきら 本会名誉会員）